

池のシンボル ジュンサイ再生活動

市川市蓴菜池にジュンサイを残そう市民の会

代表 松田仁松

はじめに

関東地方でも珍しくなかった水草、ジュンサイが開発に依る都市化の影響で、殆ど首都圏で絶滅してしまった。ここ市川市においても、1935年には自生していたことが久内清孝の残した文献にある。

その蓴菜沼が戦後、田んぼになり、1955年頃からの周田の宅地化と休耕田化によって荒廃していたのを、住民の要望を受けて市川市が、1975年から5カ年かけて一応もとの池を復元した。

池は大小4つに分かれているが、市当局が水生植物池として計画した1,800平方メートルばかりの池（L1池）で、水草ジュンサイを再生させようと地元住民が1981年から再生活動に取り組んで、4年目によりやく成功した。1984年の夏のことである。同年10月、地元住民が中心になって、これに協力する市民で「蓴菜池にジュンサイを残そう市民の会」を結成した。350所帯の市民が会員になった。

ことし、1990年10周年を迎えた。この水生植物池で現在ジュンサイをはじめとして30種類の水草が育っている。

活動の内容・成果

(1) 育成保全委員

「会」のメンバーのうちから、この池でジュンサイの育成保全の諸作業に自発的に参加する方を年初に決めて、月1回の定例作業、状況に応じ臨時作業を実施してきた。1989年27名、作業実施日数26回、のべ193名（男118名、女75名）、1990年31名、10月末まで、作業日数21回、のべ189名（男141名、女48名）。作業内容：池の底に拡がるアオミドロ類、過繁茂したヒルムシロ、シャジクモ、キクモ、フトイ、サジオモダカなどの除去作業、および池の一部、育成試験区（約200平方メートル）の周田に設置した素掘りの廃水溝の泥上げ、そして過繁茂した周辺の陸性雑草の草刈りであった。また有志委員は連日、

汲み上げ井戸水の流入状況や廃水ポンプの稼働状況、随時、水のペーハーの調査など実施してきた。

50年前、自生していた当時は湧水がジュンサイを育てていた。今は湧水はなく、池と接している斜面林の裾野から汲み上げている井戸水に依って辛くも育っているというのが実情といえる。周囲の環境も一変している。育成保全への地元住民や広汎な市民の自発的な実践活動なしには、到底次の世代に残すことは不可能と考えられる。それだけに「会」の活動の中で育成保全作業は中核をなしているといえる。

10年前、市当局はジュンサイを再生させることは考慮していなかった。その2年前、地元中国分4丁目の住民130所帯で結成、足元の自然をだいじにしようと「中国分4丁目の環境を良くする会」が同じ丁目の蓴菜池緑地(8.5ヘクタール)の清掃活動を発展させて、蓴菜池にジュンサイをとということで、市長に持ち込んだのがジュンサイ再生活動の発端である。その活動がみのって「蓴菜池にジュンサイを残そう市民の会」へと発展した。

(2) 広報活動

1989年度会員631所帯、1990年度595所帯(10月29日現在、会費納入済み)の会員に「会」の日常活動を知らせるため、広報連絡委員が中心になって、会報とジュンサイ通信を発行、配布している。昨年、会報は6回、通信は5回。今年は10月末まで会報5回、通信は4回。なお、昨年9月、フルカラーもできる新鋭コピー機をリース契約で導入して活用している。昨年の広報委員は15名、今年は17名が担当してきている。

また広報活動の一環として、昨年も今年も3月から10月にわたって、月1回第3日曜午前9時から正午まで「蓴菜池にジュンサイを観る会」を開催し、講師に大滝末男氏を迎えて3月はミツガシワの花、4月末から10月までコウホネ、ヒツジグサの花、5月にはショウブ、6月にはジュンサイの花、8月下旬から9月にかけてオニバスの開花を、多くの市民にみてもらった。その際、アンケートに協力していただいた。その結果、ここに来た市民はすべてこの蓴菜池には、ジュンサイが必要だと記入したのが判った。

また数年前から市当局に要望していた「水草案内板」が、昨年6月、ようやく実現し、育成試験池の傍に設置された。「会」ではここで育っている水草10種類について、その写真の原板と説明文を提出、掲載してもらった。地元の新聞にも紹介された。

今年4月から5月にかけて、写真展を開催した。ジュンサイ再生活動十周年の記念事

業の一つである。開催のビラには、「水と泥の中を這いずって10年、都市砂漠の中でロマンを追って10年、その実践活動の中からレンズを通して訴えます。」と書いた。

(3) 調査・研究

1989年

- 5月 加崎英男氏からこの池の繁茂しているシャジクモについて勉強会
- 6月 斉藤忠義氏からシャジクモと神経細胞についてお話を聴く
- 7月 岩瀬 徹氏からこの池の陸性野草について勉強会

1990年

- 3月 佐野郷美氏からL1池、L2池に産卵に来たアズマヒキガエルについて研究会
- 9月 野村圭佑氏から蓴菜池緑地全域のトンボについて勉強会

なお、1989年6月山形県村山市大谷地沼にてジュンサイの自生状態見学（26名）

(4) 市行政当局との関わり

もともとこの池は谷津にできた溜池で、低地部分5.3ヘクタール（国有地）と斜面林部分3.2ヘクタール（私有地を市川市が買上げ）を合わせて蓴菜池緑地という都市公園として市が整備し、管理している。国有地については、国の使用許可手つづきをとっている。10年前、住民が水生植物池（L1池）にジュンサイを再生させたいと山形県村山市に赴き、ジュンサイの苗を譲り受けて持ちかえり、市川市長に池にジュンサイ再生を要望、市長は「育つものであれば育てたい、協力してくれ」ということで、この再生活動は行政、住民、学識者の3者の協力で出発した。ところが1986年12月、市当局はL1池は「会」に任せるとして、その後育成保全の作業から手をひいてしまった。「会」としては、これまで1円たりとも市にたいし、補助を受けたことも、補助を要望したこともない。みんな自前でべんとうでやってきた。市長は日頃、市川市は自然の息づく街、市民の発想を市政に生かすと公言している。1984年夏、200平方メートルの育成試験池でジュンサイの育成に成功、10月の「会」結成式に「都市化の現象著しい今日にあって、皆様方におかれましては、蓴菜池緑地の環境保全とジュンサイを次の世代に残すために積極的に取り組まれる姿勢はまことに頼もしい限りでありまして、心から敬意を表します」のメッセージを届けた。

いま、蓴菜池緑地は内容の整備を進めるとしている。しかし、やっている内容は都市公園の悪い見本のようなことを平気で進めている。昨年秋、K2池の水辺を50センチ

メートルから1メートルの切土をして延長170メートル、はば8メートルにわたってコンクリートを流し込んでその上に自然石をはる工事を強行した。「会」では、工事の即時中止を市長に要請、3,870名の署名簿を提出した。11月23日には、桜井善雄氏を招いてここ蕁菜池緑地における水辺のありかたについて講演をしてもらった。桜井氏は「水」誌上('89年12月号)市川市当局のやりかたにたいし、「ためにするもの」といわれてもしかたないと言いつけている。

そして今年はまだ、せっかくジュンサイが育っているL1池の脇の園路を、アスファルト舗装する予算を計上している。「会」では、5月17日市長に学識者3名の提言を付して、舗装の再検討を要請した。8月18日には1,500名の舗装反対の署名簿を提出した。

(5) むすび

都市公園の園路は必ずコンクリートやアスファルトで舗装しなければすまないという市行政とは、ねばりづよく話し合いをつづけなければならないのは当然と考える。

「会」としてこれからのみちは、厳しい対応を迫られる事態が予想される。それは二重の意味において試練をうける。1つは硬直した市行政とのかかわりの面において、もう1つはさらに重要なことであるが、一旦絶滅した野生生物はその保全について、相当永い期間に亘る努力を要するという面においてである。

「会」としては、徑に依らず、大道を往く覚悟で進む所存である。

まちはなし

じゅん菜池を大掃除

市川

好天に恵まれた土曜、市川市中央分団「自のじゅん菜池公園」で、市民のボランティア団体



「じゅん菜池にジュンサイを殖そう市民の会」の約二十人が、じゅん菜の発芽に備えて、育成試験池の大掃除を行った。写真。今年初めての掃除とあって、池の中には昨秋からはびこった雑草や藻がいつぱい。汗まみれで働き、約二時間後、池はすっかりきれいになった。「足元の緑を守る」と思っ

たのがきっかけで運動を始めました。同会会長の松田仁松さん（七〇）。市民主体の十年にわたる浄化活動が実り、最近ではヤンマやカワセミの姿も見られるようになった。「生態系全体を保護しなくては」との思いから先月末、池の周りの除草剤散布や道路舗装

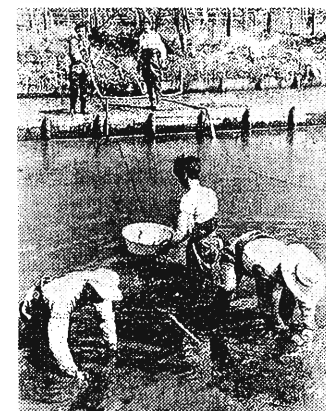
平成元年 3月13日 朝日新聞

じゅん菜池を清掃

16日には発芽を見る会開く

市川で大学生も応援に

市川市中央分、じゅん菜池公園で九日、「じゅん菜池にジュンサイを殖そう市民の会」の松田仁松会長（七〇）はじめのメンバーが、水生植物育成池の清掃奉仕に汗を流した。



大学生の協力も得て育成池を清掃＝市川市で

ネといった植物十種類を試験育成、繁殖にも成功した。松田さんらは日常の管理を引き受け、清掃奉仕は水生植物の発芽を前に行ってきたが、この日は会員九人のほか、早稲田大学の学生二人も協力に駆けつけた。作業は約九百平方メートルの池に繁殖した水生植物の育成を妨げる緑藻（あ開かれる。

おくさ)の除去が主で、早朝から排水作業後、水深四、五十センチの泥田の中で腰をかかめながらの労働。

平成元年 4月10日 東京新聞

ジュンサイ再生の写真展

活動十年の記録を一堂に

その会 残市民

中国分四丁目のじゅん菜池で、水生植物のジュンサイ再生に取り組みました。「寂しいじゅん菜池」ジュンサイを残そう市民の会（松田）に松代表議員約六百四十世帯は、再生係半周年を記念して、「写真展」を開催した。

五月二・三日の三日間、八幡の市民談話室・三階のギャラリーを会場に、約二百点の写真や資料を飾って、十年間の活動を紹介した。

「市民の会」の前身は、一九七八年九月に発足した「中国分環境を良くする会」。この年の春、向地区に東京・中央区にある女子学園の寄宿舎建設にかかわるトラブルが生じて、会が設立。その後荒れ放題だったじゅん菜池整備の方をへ

はかりでなく、オニバス、コオホネ、ヒツジグサ、シヨウブなどの水生植物、池に舞うカワセミ、ゴイサギなどの鳥類、カエルとの産卵などの写真、十年間の活動の要点をまとめた記録などを会場に並べた。

資料として「新聞にのったジュンサイ再生保全活動」「市長への提言要望」「コンクリート護岸化反対活動ノート」「市民の会会報」も自由にみられるようになった。

また、自然保護を訴え、人工的に手を入れたじゅん菜池水辺の園路を原状に戻すための署名も行われ、多くの見学者はサインをしていた。

平成元年 5月15日 ウォッチ市川



じゅん菜池緑地（中国分4丁目で）

ジュンサイ復活の動き (専菜池にジュンサイを残そう市民の会)	
'79. 9月	「中国分環境を良くする会」誕生
'81. 6月	じゅん菜池緑地公園に計画された水生植物池2カ所から山形からの苗植えこむが失敗
10月	再度山形に行き苗をいただき、松田さんの自宅で育成開始（約100鉢）
'82. 6月	発芽させたものを池の2カ所へ移す
7月	水草研究会・大滝木男会長に水質などの現地調査を依頼
10月	市長に池の一部を仕切り、育成試験区設定のための整備を要請
'83. 7月	整備されたため、19日に移植するも、27日の集中豪雨で泥水流入
9月	泥水流入により失敗
'84. 3月	アメリカザリガニ完全駆除
4月	1株ずつでなく群れとしてまとめて移植
夏	はじめて活著し、約200㎡全面に広がる
10月	「専菜池にジュンサイを残そう市民の会」を設立。市にじゅん菜池の整備を要請（育成池のすみかにオニバスの幼苗移植）
'85. 9月	（オニバス花を開く）
11月	'83年7月より使用していた水道水を、浅井水の水に切りかえ、一部に水温調整池設置
'86. 6月	育成池でたくさん花をつける
9月	本池（中央部の900㎡）の整備完了
'87. 5月	本池に移植（ヒツジグサ、コウホネ、オニバスの苗も移植）
6月	（育成池のすみかにヒツジグサを移植）
夏	（本池周辺にカキツバタ、ミツガシワ移植）
'88. 4月	本池に苗を追加移植
5月	新規度井戸2本の水を流し込む

活動10年を紹介した「写真展」
(市民談話室3階ギャラリー)



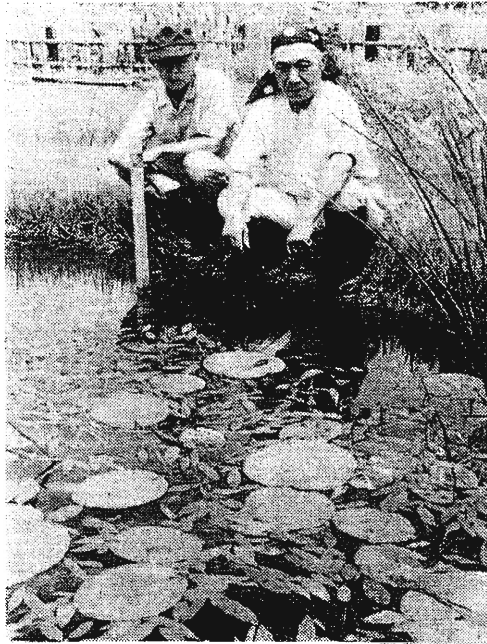
「市民の会」は、じゅん菜池緑地内の一定区域を自然度の高いエリアとして保全することを求めてきただけに、自然さ

なお、中国分四丁目の押越守さん撮影（八六年六月十六日）の「ジュンサイ開花と若芽」の写真を使ったオレンシカードが五月十五日から発売される。

このオレンシカードは、東日本旅客鉄道（JR東日本）の「あなたの街・市川」シリーズのひとつ。ジュンサイの花（オニバス）として売られる。

「市川」の三カ所

ジュンサイ（専菜） 水深一メートル程度の沼や池に密生しているスイレン科多年生水草。若芽、若葉は食用で、葉巻状の葉が寒天質の糊液で包まれた独特の舌ざわりの淡白な味をもち、酢のもの、お吸いものなどの料理で親しまれている。古名はぬなね。



群生したジュンサイを見守る松田さん(左)ら＝市川で昨年8月の最盛期に写す

七年の努力結実

市川 じゅん菜池再生で受賞

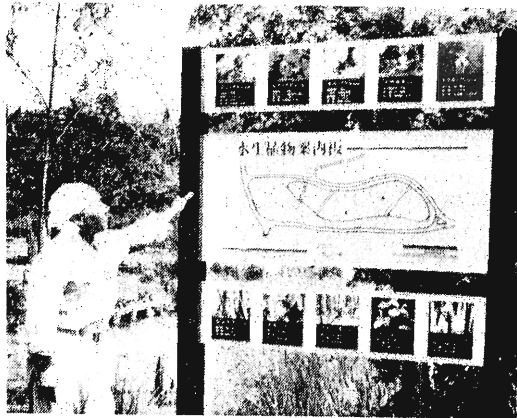
市川市中国分の「じゅん菜池公園」の絶滅したジュンサイを七年がかりで再生、自然環境を復活させた市民グループ「じゅん菜池にジュンサイを残そう市民の会」代表松田仁松さん(左)、同所四ノ七Ⅱが、自然保護活動への貢献が認められ、このほど国立公園協会(大井道夫理事長)から「タカラファームモニストファンド賞」を受賞、活動資金として助成金四十万円を受けた。

じゅん菜池公園は市川市が十四年前、国有地の使用許可を受け、隣接の斜面林三・二畝を買収、六年がかりで造成した。広さは八・五畝。昔は自然に恵まれた湿地でジュンサイなど水生植物が自生していたが、敗戦後荒地となり、ゴミ捨て場になってジュンサイなどが絶滅した。松田さんらは同公園の清掃奉仕を行ううちジュンサイを再生させようと思い立ち、仲間十数人と松田さんの郷里の山形県から苗を取り寄せ、何度も失敗を重ねた末、ジュンサイを群生させることに成功した。以来、水生植物のヒツジグサ、コウホネ、オニバスなどの増殖も行っている。市民の会の会員は約二千人に増え、交代で池の管理をして自然保護への認識を広めている。

同会では「活動が園から認められた」と喜び、助成金も有効に使いたいと使途を検討している。

平成元年 6月22日 東京新聞

水生植物池に設置された案内板「市川のしゅん菜池緑地公園」



市川のしゅん菜池緑地公園

自然保護の住民グループ「しゅん菜池にジュンサイを残そう市民の会」（松田仁松会長、会員1300人）のメンバーが手塩にかけて育てている市川市中国分4丁目、しゅん菜池緑地公園内の水生植物池に、自生する植物を紹介する「水草案内板」がお目見えした。同会が公園を管理する市に設置を要望していたもので、水草の写真に説明文が加えられた。パネルがシーズンごとに差し替えられ、觀賞のため池を訪れる市民に季節の移ろいを知らせるといふ。

水草案内板 お目見え

自生の植物紹介

写真と説明文 季節ごとに差し替え

広さ千八百平方メートルの水生植物池のほとり立てられた案内板は高さ二メートル、幅一メートル四十分の大きさ。アルミ製で、中央に池の見取り図と觀賞できる植物が育てられている場所が記されている。

同年発足した市民の会の中に、都市の中の公園に水生植物を育てようという活動の

輪が年ごとに広がり、国立公園協会の推薦で、今月には優れた自然保護活動をしている団体に贈られる公益信託「タカラファーマーモンスターファン」から助成金を受けるとまでに成長した。

念願の「水生植物案内板」を見上げながら松田さんは「都市の中の自然に触れた、一人でも多くの方が足を運んでほしい」と話している。

上下には十組のパネル入れが設けられ、ジュンサイをはじめヒツジゲサ、オニバス、コウホネ、ミツガシワ、ショウブなど同池に自生している二十種類の水生植物を紹介するパネルが差し込まれている。パネルの写真は同会副会長の押越守さんが撮影、会の活動をアドバイザーをしている水草研究の権威、大滝末男さんが説明文を書いた。

かれんな葉を水面に浮かべるジュンサイが池一面に繁殖していたのが、同公園の名の由来。戦後の食糧難時代に食用として取り尽くされ、姿を見ることがなくなったジュンサイを復活しようと、松田さんが公園北側の試験栽培池に

平成元年 6月27日 千葉日報

しゃれた水生植物案内板

自生植物が一目で

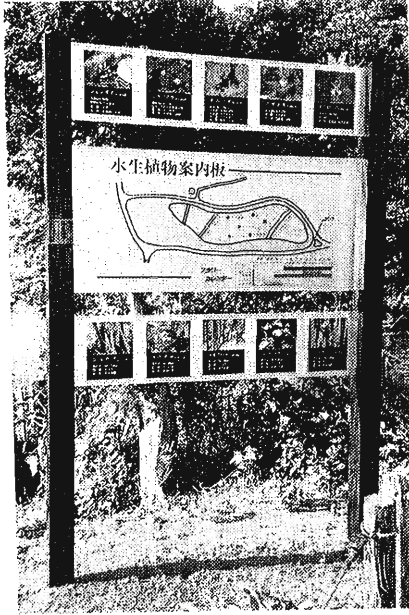
パネルの差し替えも

市川で、生え抜きの自然保護市民グループ「じゅん菜池にジュンサイを残そう市民の会」（松田仁松会長）の長年の要望が実り、この程、じゅん菜池緑地公園水生植物池の入口に、ユニークな専用案内板が設置された。

市川のじゅん菜池緑地公園

案内板は、高さ二メートル、幅一メートル、上と下にそれぞれが四十センチのアルミ製のスマー

五枚ずつのパネルをはさま込み、中央に池の地図と水生植物のおよその生育場所が記されている。パネルはまだ八枚の予備があり季節に合わせて



しゃれたパネルの差し替もできる案内板

さし替えてゆく。今後もう少しずつパネルをちりちりしてゆき、きめ細やかな案内板にしたい意向。

写真撮影は同会副会長の押越守さんの手によるもの、下欄の「花期・分布・特徴」などの説明は、この会を一貫してアドバイザーとして支えている水草研究家・大滝末男さんの手になっている。ただ今は、ジュンサイ・ヒツジグサ、オニバス、コウボネ、オモタカ、シヨウブ、ミツガシワ、ハンゲシヨウ、ミクリのパネルがかかっている。

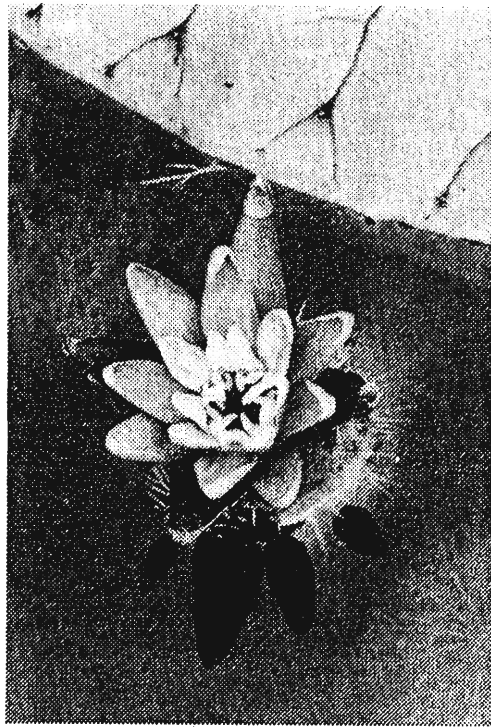
二十八日には池周辺の陸生植物の学習会が、岩瀬徹講師を招いて開催した。こうして古代に生きた水生植物ジュンサイの育生が始まって、現在は、水中に生きる生物、魚やかえる、陸の植物に至るまで、

深く知ろうと専門家を招いての学習は輪を広げる。池周辺は道には舗装はせず、また農薬も使用しないように手配の手を怠らない。自然

界があるがままの自然を示すとき、人は限りなく学び、いこう。「会」の人は、そこに展開される自然界を限りなくいっしょくしみ日々見守る。

平成元年 7月25日 京葉市民新聞

紫色鮮やかオニバス咲く



市川の水生植物池

市川市のじゅんさい池緑地にある水生植物池で、このほど珍しいオニバスが一輪咲いた。今年初めてで、直径約四寸。濃い緑に包まれた小さな池の水面に、紫色のはなびらがひときわ映えた。

現在、県内でオニバスが見られるのはここだけ。それも年に

珍しいオニバスの花。中心から黄、白、紫、赤紫と色鮮やかだ。市川市中国分四丁目、じゅんさい池緑地「水生植物池」で

数輪だ。朝開いた花は午後にはしぼむ。

一年草で八九月に花をつけるオニバスは、水の汚れなどで激減した。日本自然保護協会などの調査では、このままだと絶滅する「危急種」。県指定天然記念物の印旛郡本埜村のオニバスは八十三年ごろから全く芽が出なくなり、県が植生回復に乗り出した。

じゅんさい池には、同市中国分四丁目の松田仁松さん（七）が八四年と八七年に植えた。松田さんらの市民グループが池をそろうして水質を守り、オニバスを咲かせている。



平成2年5月、JR東日本のオレンジカードになったジュンサイの花
昭和61年6月21日 ジュンサイ育成池で



水底のアオミドロ除去 平成2年3月11日



季語、葛（ヌナワ）の句作会 平成元年7月4日



遠足で来池の小学生にジュンサイを説明